

〈PR〉

カラダの 相談室

北浜えぎ整形外科 院長
恵木 丈さん

第2回



関節リウマチ

関節の痛みや腫れ、手のこわばりから始まり、変形が生じます。不治の病と言われたのは昔の話。今では新しい治療薬も開発され、痛みが治まり症状が安定した状態、「寛解(かんかい)」が望めます。

原因の多くは後天的要素に 早期発見・早期治療が大切

Q 初期症状は？

A 患者さんの7、8割が手首、足首から先の小さな関節の痛み、腫れを訴えます。「朝の手のこわばり」もよくある症状です。リウマチは対称性の関節炎という認識が一般的ですが、必ずしもそうではありません。世界共通の判断基準があり、それに則って早期診断することが重要です。

Q 親がリウマチです。遺伝するのでしょうか。

A リウマチは自己免疫異常が原因なので、遺伝的要因が主だと思われがちですが、全体の約3割にすぎません。残り約7割は後天的要素で、喫煙、歯周病、腸内細菌異常などの環境要因です。特に喫煙は悪影響があり、吸わない人と比べて約2倍も発症率が高くなります。

また実験段階ですが、関節リウマチの発症には、ある特定の腸内細菌の増加も関係することが分かっています。

Q 発症する年代や性差はありますか。また、どのように進行していきますか。

A 患者数は国内で約100万人、発症年齢で一番多いのが30〜50歳代です。また高齢化に伴い60〜70歳代の「高齢発症関節リウマチ」も増えています。性差では女性が多く、男性の約4、5倍です。

この病気は自己免疫疾患です。自分自身の体を守る免疫細胞が、逆に自分自身を敵とみなして攻撃するのです。その反応として関節内の滑膜という組織が異常増殖し関節内組織に炎症を引き起こします。進行すると関節や軟骨が破壊され変形し、いろいろな機能障害が起こります。最終的には骨粗鬆(こつそしょう)症にも関係する破骨細胞の活性化により、自身の骨をも破壊して

いきます。

関節リウマチは発症後2、3年で一気に進行します。そのため早期に診断し治療することが大切です。

Q 日々医学は進歩していますが、どのような治療をするのですか。

A リウマチと診断されると昔の治療は、「痛み止め(非ステロイド系抗炎症薬)」からステロイド、次にステロイド系の薬剤、その後リウマチ専用薬を使うステップアップの治療でした。しかしこの治療計画では、その間に症状が進行して骨・関節破壊を起こし、不可逆性の関節変形、機能障害が残ります。

症状進行に速やかに対応するため、今の治療ではまず治療効果の高い薬から使います。

治療の基本は、発症早期からの「抗リウマチ薬」の開始で、必要に応じて極力短期間に限り炎症や痛みを軽減するステロイドを使います。

3カ月経過後も当初の薬効が乏しい場合は、症状に合わせて別の抗リウマチ薬の追加や免疫異常を促す物質を抑制し、高い治療効果が期待できる注射薬の「生物学的製剤」を使用します。また分子標的型の抗リウマチ薬も有効で、持病の有無を検査した上で使用します。

炎症が進み関節が壊れ変形、破壊が進行し重症化することもあります。その場合は薬物治療を行いながら、人工関節置換術などの手術治療も検討します。

関節リウマチは不治の病ではありません。早期発見、早期治療で寛解する可能性が高まり、また重症化していても寛解も望めます。手足の関節の腫れや手のこわばりが気になる人は、定期的なリウマチ専門医の診断をお薦めします(次回は骨粗鬆症)。



えぎ・たけし 医学博士。大阪市立大学医学部卒業。同大学附属病院や関連病院などで整形外科、手外科、リウマチ科、リハビリテーション科の診療や研究。若手医師の育成を行う。日本整形外科学会専門医。日本手外科学会専門医、指導医、代議員。日本リウマチ学会専門医、指導医、評議員。令和3年4月開院。Best Doctors in Japan (2012年から連続選出中)など。
☆北浜えぎ整形外科 大阪市中央区高麗橋2の4の2
メディカルビル北浜3階
Tel 06・6205・8338

〈企画・制作〉産経新聞社メディア営業局